

# 6月 月例研修会

## 歴史共催 當麻の里を訪ねる



梅雨の最中の6月8日(火)、當麻の里を訪ねる例会が開催された。9時半に近鉄當麻寺駅

に集合したのは16名とぐずついたお天気のせいかな少なめである。川井代表の挨拶の後、一路當麻寺に向かう。平日の門前町は人も少なめで落ち着いた佇まいである。

境内の塔頭護念院に入り若いご住職のお迎えを受け、當麻寺の歴史や中将姫のお話を聞かせて頂く。毎年5月14日の中将姫の命日には、當麻お練りという25菩薩が本堂から娑婆堂の間を練り歩くという練供養会式がある。お練りで使われる観音菩薩面を住職から一人一人被せてもらい「南無阿弥陀仏」と唱えた。これで極楽往生できると皆さん大満足、得難い体験をさせて頂いた。次いで、本堂に移り老師(ご住職の父上)より當麻寺の仏像や當麻曼荼羅のお話を伺った。



お練りで使われる観音菩薩面を住職から一人一人被せてもらい「南無阿弥陀仏」と唱えた。これで極楽往生できると皆さん大満足、得難い体験をさせて頂いた。次いで、本堂に移り老師(ご住職の父上)より當麻寺の仏像や當麻曼荼羅のお話を伺った。

當麻寺は法隆寺に次いで国宝や重要文化財が多いそうで、金堂の四天王像も修理中であった。建物としては、東西に聳える国宝三重塔が特に素晴らしい。當麻寺は鄙びた田舎にあったせいで兵火にも合わなかった。東西の塔が創建時のまま残っているのはここだけである。



じっくりとお寺を拝観後、鳥谷口古墳に向かう。ここは7世紀末の古墳で、天武天皇の第3皇子で皇位継承をめぐり悲劇的な死をとげた、大津皇子の墓である説が有力視されている。大津皇子は優れた万葉歌人で、姉の大伯皇女とともに万葉集に

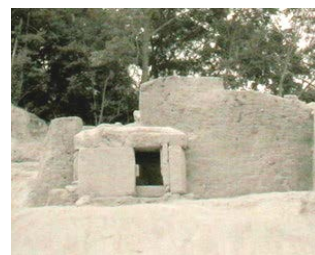
数首残している。皇子の残した相聞歌や辞世歌を皆で朗読し、往時を偲び悲劇の皇子に思いをはせた。日本書記には大津皇子は文武に秀で、素晴らしい歌を詠み群臣に慕われていたとあり、抜群の人物であったようである。しかし、血筋も良く、できるが故に皇太子草壁皇子の強力なライバルと見做され謀反の疑いをかけられる。朱鳥元年(686年)10月3日に磐余にある訳語田の自邸にて大津は自害した。享年24歳の若さであった。大津皇子、石川郎女に贈り賜いし御歌一首「あしひきの山の雫に妹待つと我立ち濡れぬ山の雫に」石川郎女、和へ奉る歌「吾を待つと君が濡れけむあしひきの山の雫にならまし



ものを」。この相聞歌は特に有名で、若い二人の恋心が現代の我々にもよく伝わってくる。大津皇子には同母の姉大伯皇女がおり二人は

幼い頃、母を亡くしとても仲が良かった。大津の亡骸を二上山に改葬した後、大伯皇女が弟を偲んで詠んだ次の歌も良く知られている「うつそみの人なる我や明日よりは二上山を弟と我が見む」万葉学者故犬養孝先生の揮毫による歌碑は、二上山を望む景勝の地に建てられている。

鳥谷口古墳は、公園の造成中に発見された一辺7.6mの小さな方墳で、築造は7世紀末のものである。石槨も非常に小さく通常の埋葬施設とは言い難いものである。



大津皇子は罪人であり、二上山に移葬されたと書記に載っていることから、皇子の遺骨を葬ったのではないかとの理由で大津皇子墓説が有力である。

昼食の後、當麻山口神社、傘堂、石光寺と回り帰路についた。お土産は當麻寺駅近くの名物のよもぎ餅を買って帰った。ここの餅はよもぎ餅にあんこをまぶしたもので、甘すぎずおいしい。お薦めです。

(杉本 登)